

帰化植物の話

ー都内でブラジルコミカンソウが低木化ー

全国農村教育協会 廣田伸七

東京のど真中電器街で有名な秋葉原を通る昭和通り、この道の両側の歩道にはイチョウが並木として植えてあり、その下にはつつじのオオムラサキ、ネズミモチなどが植えられ高さ約1mに苳り込まれている。ここにオオムラサキやネズミモチよりも20cmも高くなったブラジルコミカンソウ（別名ナガエコミカンソウ）＜トウダイグサ科＞（*Phyllanthus tenellus* Roxb.）が枝を広げ、9月現在花を咲かせている。日本では種から発生し、茎の高さ10～70cmの1年生とされているが、ここでは多年生低木状となっている。

ブラジルコミカンソウはアフリカ、インド洋諸島原産とされる帰化植物で、世界中の熱帯～亜熱帯に広く帰化していて、わが国では1992年福岡県で採集され、その後各地に広がり、現在では千葉、東京、神奈川、大阪、兵庫、広島、山口、福岡、宮崎、沖縄などに帰化の記録がある。（帰化植物便覧・太刀掛優、中村慎吾編・比婆科学教育振興会、2007年発行による）

ブラジルコミカンソウは道端や空地に発生

する低木または1年生草本。全体無毛で茎はしばしば紫色を帯びて直立し、水平方向に枝を出し、葉は長さ約1cmで先が尖った広卵形、ごく短い柄があって互生して複葉のように見える。夏～秋にかけて葉腋に5mm内外の柄を出して先に花を咲かせ球状の果実をつける。類似種の在来のコミカンソウは葉腋に無柄の花を咲かせて果実を結ぶので果実には柄が無い。これに対しブラジルコミカンソウの果実には長い柄があるので、別名ナガエコミカンソウの名がある。

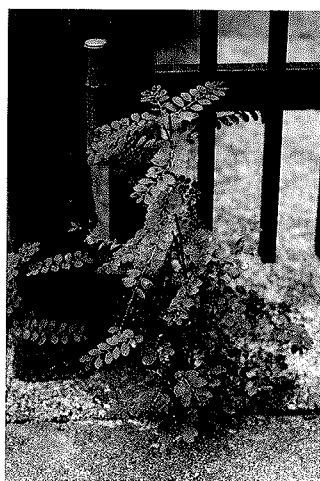
熱帯地方では多年生の低木となるが、わが国では普通は春に種子から発生して高さ10～70cmとなり、秋には種子ができて枯れるという1年生の生活型とされている。しかし、東京秋葉原のつつじやネズミモチの植込みの中に生育するものは明らかに多年生低木となって生育している。これも地球温暖化の影響かと興味をもって見守っている。もっとも同じ秋葉原でも住宅の道路の敷石の隙間や並木の植ますなどにはえるのは1年生の生活型をしている。



▲つつじやネズミモチより高く伸びる低木化したブラジルコミカンソウ



▲低木化したブラジルコミカンソウ（工事中のため独立していた）



▲住宅地にはえた1年生型ブラジルコミカンソウ